

EVT failure 後の重症虚血肢に対し，spliced vein graft による distal bypass で救肢した症例

弘前大学 胸部心臓血管外科

今村優紀 (いまむら ゆうき ; 27 才)

千代谷 真理, 谷口 哲, 福田 幾夫

74 歳，男性．糖尿病性の慢性腎不全で維持透析中．既往として，2 年前に CABG で右大伏在静脈を膝下まで使用．1 年前に左膝上膝窩動脈-後脛骨動脈バイパスを施行し，左大伏在静脈を膝上から使用済み．強い安静時疼痛と右第 2，3，4 趾潰瘍壊疽で受診．CT で右下腿三分岐以下に石灰化を伴う全閉塞を認めた．両側大伏在静脈使用後のため，EVT を選択．run off が良い前脛骨動脈にアプローチしたがワイヤーは通過したもののバルーンが通過せず．Crosser を用いたが最後に先端チップが遺残してしまい断念．後脛骨動脈のみバルーン形成術を施行し終了．安静時痛は軽減したが虚血の解除は限定的．一旦退院したが，2 週間後，再度安静時疼痛を認め受診．足趾壊疽の悪化・感染あり．CT で後脛骨動脈の再狭窄を認め入院．残存した左大伏在静脈中樞と右大伏在静脈末梢の spliced graft による右膝下膝窩動脈-前脛骨動脈バイパスを施行．壊死の進行は止まり，感染もコントロールされた．